

科学者委員会男女共同参画分科会（第24期・第2回）  
Gender Summit 10 フォローアップ小分科会（第24期・第2回）  
合同会議議事要旨

1 日 時 平成30年6月14日（木）10時00分～12時00分

2 場 所 日本学術会議 6-C(2)(3)会議室（6階）

3 出席者

<男女共同参画分科会>

※は Gender Summit 10 フォローアップ小分科会委員も兼ねる  
三成美保委員長（※）、藤井良一副委員長（※）、伊藤公雄幹事（※）、  
久留島典子委員、永瀬伸子委員、大杉立委員、熊谷日登美委員、  
加藤昌子委員、野尻美保子委員、井野瀬久美恵委員（※）、  
高橋裕子委員（※）、谷口洋幸委員、新福洋子委員

<Gender Summit 10 フォローアップ小分科会>

※は男女共同参画分科会委員も兼ねる  
渡辺美代子委員長※、松尾由賀利副委員長、行木陽子幹事、

4 配布資料

資料1-1 男女共同参画分科会（第1回）議事要旨

資料1-2 Gender Summit 10 フォローアップ小分科会（第1回）議事要旨案

資料2 学術フォーラム「ジェンダー視点を変える科学・技術の未来  
～GS10 フォローアップ～」関係資料

資料3 『学術の動向』特集案

資料4 若手研究者から見た男女共同参画の現状と改善策

資料5 公開シンポジウム「ハラスメントを鏡に、日本社会を検証する  
——なぜまっとうな議論ができないのか？」の開催について

資料6 「女子中高生夏の学校 2018～科学・技術・人との出会い～」の後援について

5 議題

(1) 前回議事要旨について

- ・ Gender Summit 10 フォローアップ小分科会（第1回）の議事要旨について、メールでの事前確認は終了しているものの、意見がある場合は、分科会終了までに連絡することとなった。

※男女共同参画分科会（第1回）の議事要旨については、既に確認・掲載済

(2) 学術フォーラム「ジェンダー視点を変える科学・技術の未来～GS10 フォローアップ～」について

- ・ 資料2に沿って流れが確認された。

### (3) 今後の展開について

- ・ 前回の Gender Summit 10 フォローアップ小分科会において、今回の学術フォーラムの内容を『学術の動向』へ特集を掲載することが提案された。提案を受けて作成された特集の企画案について渡辺委員長より説明があった。
- ・ 企画案は了承され、掲載号については『学術の動向』編集分科会の判断にゆだねることとされた。

### (4) 若手アカデミーからの報告

新福委員及び若手アカデミーの伊藤連携会員より「若手研究者から見た男女共同参画の現状と改善策」についての報告があった。

今回の報告は、前回の分科会での議論を踏まえ、若手アカデミーに男女共同参画に関する情報提供を行い、どのようなことが考えられているか、についてまとめたものである。

#### <意見交換>

#### デュアルハイヤーについて

- ・ 実際実現していくことを考えたときには、ファンディングにリンクさせるようなアイデアがないと通用しない。
- ・ 二人がバランスの取れた生活ができるような雇用の仕方（生活する単位を損なわずに生活できるような条件）を日本も検討していく必要があると思う。研究者だけに特化して整理しようとする、なかなか広がらないため、企業などのほかの働き方も含めて考える必要がある。
- ・ 社会における研究職の場所をどう拡大していくか、研究職を必要とする社会にどう変えていくか、といった視点でないとイノベーションが起きない。そういう社会になっていかなければいけないということを若手側がリードして言う必要がある。その手段としてデュアルハイヤーがついてくるのだと思う。

#### 意識改革について

- ・ 女性は子育てをやるのが当然、女性だからジェンダー研究に関心がある、というような、女性だからこうだ、というバイアスされている状況から変えていかないといけない。
- ・ 科学史研究とジェンダーについての議論は結構ずっとされている。近代科学は男性主導なので、どうしても細分化して客観的に分類して見てしまう。一方、女性の場合は（環境による影響が大きいとは思いますが）比較的マクロで見る。その視点が科学イノベーションにつながるということはあると思う。最近ようやく防災の分野でジェンダーの話が入ってくるようになったが、そこはある種の男女の文化のずれが感じられる部分である。男性の文化の視野の狭いところをひっくり返すということでジェンダーイノベーションがあると思う。
- ・ 男性マネジメントについて違和感を持っているのであれば、それを整理して男性にぶつける必要がある。男性はそれに気づいておらず正常だと思っているので、正常ではないということをコミュニケーションして伝えないといけない。また、気づいていないのであれば、「黒船を呼ぶ」くらいのこと考えなければいけない。
- ・ 70年代80年代に、日本型の性別役割分業システムがうまくいき、安定成長できてし

まった。90年代以降もそのパターンから抜け切れず、危機意識がない状態にある。しかし、少子化の波が来ているということは、結果としてはうまくいっていない、ということであり、それを認識する必要がある。

### 女性を進出させるには

- ・ 世代を超えて若手をサポートするネットワークを作る必要がある。日本で様々な機関のトップに女性が出ていないことは、世界から見れば異常である。そこが変わっていけば、様々なところに波及していくと思う。この点を中高年の人たちに今一度考えてもらう必要がある。(しかし、中高年を動かそうと思っても難しいところがある。)
- ・ メリットがわかれば動けると思う。若手には柔軟な頭で、こんなメリットが作れる、ということを示してほしい。
- ・ 女性が入ってくることによって、どういう地平が見えてくるのか。質が変わってくるといえることが見えてくると、受け入れて一緒にやっっていこうと思えるのではないか。若い人たちがそういうものを見せてくれる機会があると少し変わってくると思う。
- ・ 日本では男女の賃金格差が大きく、女性が戦略として結婚を通じた年収形成という手段をとってしまう。そのような点について、幅広く働きかけていかなければいけない。また、大学における性別比率を執行部が気にするように働きかけていく必要もある。
- ・ 日本では積み上げ式のため、マネジメントの上の方に行くには、その下のステップが必要である。今女性が増えてきているというのは良い状況で、20年後くらいにはそれなりの比率にはなっていると思う。一方で、自己抑制するような傾向もあるため、ロールモデルが必要ではないか。
- ・ 人材がないというのは常套句であるが、人材はそこに生まれるものではなく、作っていくものである。今は、階段を上がっていくことができないシステムになっているので、意識的にトップを作っていくような試みを大学でやっっていかななくてはならない。
- ・ 大学で意識改革等をする際、内部から動かすのは難しく、外圧をかけてもらう必要がある。そのためには審議会等の政策決定する場に女性が入っっていき重要性を説明する人が必要である。学術会議にも提言等でそういったことを伝える役目があると考えている。
- ・ ポジティブアクションの意義を学術的に検証してデータを出していく必要がある。

### 発表全体について

- ・ 現状を肯定して、現状の中でいろいろなものを改善したい、という内容であり、現状打破につながるようなことをあまり感じなかった。もどかしさを非常に感じた。今の状況にジェンダーというものをに入れて考えてみたら大きく変わる、というような視点で提案していくような形にする必要があるのではないか。
- ・ ある意味で、現在の若手の方が何を考え、どう分析しているのか、というのをよく表していると思う。ずっと議論をしてきている部分は変わらないが、産総研の取り組みなどはこの20年で変わってきたと思う。何もなかったところから、20年くらいで世の中は少しずつでも変えられるのだ、というポジティブな目線もあると思う。若手の人には現状を受けて止めた上で、変わっていない部分をどう変えていくのか、何がしたいのか・できるのか、次の世代にどう引き継いでいくのか、という検討を具体的な形で進めてもらいたい。
- ・ 若手では、入ったばかりで大学業界や研究領域がどうできているのかということがわか

らないことが多い。上の立場にいる方から情報などを教えてもらう必要がある。

- ・同じ議論をずっとしてきたというのは事実で反省点である。また、これまでにやってきたこと、その中でできたこと・できなかったことを若手に伝えてこなかったのではないか。そういう意味でも今日のような意見交換は重要であるので、こういう委員会の場を通じて情報共有をできたらと思っている。
- ・若手との情報交換に限らず、委員間においても、それぞれが持っている情報を共有して議論していく必要がある。
- ・情報はこれまで活動してきたシニアが握っていて、若手には伝わらないことが多い。その点はシニアが意識を変えないといけない部分である。若手が突き動かすこと（問題提起）とシニアが考えること（解決策）の両方をやっていく必要がある。

(5) 公開シンポジウム「ハラスメントを鏡に、日本社会を検証する——なぜまっとうな議論ができないのか？」の開催について

- ・シンポジウムの企画趣旨について渡辺委員より説明があった。
- ・文言をより一般的なものに修正すべきとの意見が出されたが、意図的に書かれた文章であることから、一部を修正・再検討するものの、基本的には原案のまま承認された。

(6) 「女子中高生夏の学校 2018～科学・技術・人との出会い～」の後援について

- ・事務局から概要について説明があった後、後援について承認された。

(7) その他

- ・次回は8月下旬に開催を予定している。

以上